

ホモキがチューリヒ歌劇場の契約延長

今月から「海外レポート」にスイスも仲間入りできることになった。「アルプスの少女ハイジ」で知られるこの小さな国は、クラシック音楽の歴史に登場することはなくとも、現在の音楽界では重要な市場だという点で日本に似ている。著名な音楽家も多数、居を構えている。これからスイス発の情報を通して、スイスの今をお届けしたい。

昨年の秋に発表されたように、チューリヒ歌劇場のアンドレアス・ホモキ総裁は契約を2025年まで延長した。ホモキが総裁に就任するにあたって「何度も説得して口説き落とされた」というファビオ・ルイジ音楽監督は、2020年の夏で当歌劇場を去り、ジャンナンドレア・ノセタに変わる。

新制作《グラン・マカーブル》

レポートリー劇場であるチューリヒ歌劇場は、毎月、新演出の初演がある。

2月は3日に初日を迎えたりゲティ《グラン・マカーブル》だった。高度な歌唱技術を必要とするオペラであるが、満足のいく歌手陣と、確信を持って楽々と指揮を執る現代曲のエキスパート、テイト・チュエツケリーニ率いるフィルハーモニア・チューリヒが高レヴェルの上演を実現させた。オーストリア人のアレクサンダー・カウムパツハーが美しいドイツ語でピートを演じ、ヴィーナス／ゲボ役のノルウエー人、エイル・インデルハウグは超高音も楽々とこなした。タチヤナ・ギユルバカの演出は奈落を上手に使い、荒唐無稽な登場人物たち

に共感できる人格を持たせ、ユダヤ系ハンガリー人として、死に直面した経験を持つリゲティが皮肉をこめて謳う「生」への肯定を表現していた(2月21日所見)。

このギユルバカは、過去にインターナショナル・オペラ・アワード等を受賞しており、日本でもすでにおなじみの演出家だが、彼女の手法は現代オペラに向いているだろう。しかし、ともしれば中だるみするモーツァルト《偽の女庭師》を飽きさせない上演に導いたのは驚きだった。先シーズンはすでにキャリアを築いている歌手陣を迎えて再演された。

古典音楽のスペシャリスト、ジャンルカ・カプアーノと2年前に訪日したヴィン

タートゥール・ムジークコレギウム管絃楽団は統括し、牽引力のある音楽ラインで歌手たちを自由に歌わせた。特に、スイスが誇るテノール、マウロ・ベーター、そしてイタリアの若手ローザ・フェオーラが光っていた(2月20日所見)。

2年ぶりにサンティが《リゴレット》

2月に再演された、ヴェルディ《リゴレット》とドニゼッティ《ランメルモールのルチア》両方に登場するはずだったディアナ・ダムラウがキャンセルしたため、先のフェオーラはジルダの役を引き受けたが、ヴェルディはまだ重いよう、本領発揮にはいたらなかった(2月6日所見)。

ギユルバカの《リゴレット》演出は、2013年の初演時から悪評高いが、今シーズンの再演に際して再度手を入られたようで、原作からさらに遠ざかっていた。ジョヴァンナ役にはオペラ・スタジオの生徒、和田朝妃が起用され存在感を示したが、ガムを噛みながら反抗的な態度を取るジョヴァンナがジルダにも悪影響を与え、父親の言い付けを守らなかつたために悲劇を招いたと言いたいのだろうか。

一方、ルチアの代役は、アルメニアの若手ニナ・ミナシヤンが耳に心地よい声で務めたが、その《ランメルモールのルチア》再演は、87歳の巨匠ネッロ・サンティが2年ぶりに当歌劇場で指揮するということで、劇場中が特別な磁気を帯びていた(2月22日所見)。

歳を取ると脈拍が遅くなり、テン

ポがゆっくりになるというのが、《愛の二重唱》や《アリア》等、極限まで遅いテンポだったが、それに耐えられる技術を備えた歌手に恵まれたのが功を奏した。新国立歌劇場でもエドガルドを歌ったイスマエーレ・ジョルディ等、発声的に危うい感じを与え、ることもなく、最後まで歌い切った。サンティはカーテンコールには一度しか登場しなかつたが、スタンディング・オウエイションの大喝采で迎えられた。

チューリヒ・トーンハレ管とスイス・ロマンド管

大・中ホールへと続く木の床全体が楽器のように共鳴する音響を誇ったトーンハレが、2017年の夏から改築のため、工業地帯の新開発地区にあるMAGでコンサート活動を続けている。最新技術により、元のホールに似た音響を作り上げた関係者は誇らしげに語るが、評判は芽えな。実際に演奏を聴いてみても、音の伸びが悪い気がする。視覚的にも味気なく、常客は我慢を強いられている。

今シーズンはチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の創立150周年記念年として華やかに開幕し、来シーズンから首席指揮者兼音楽監督に就任するパーヴ・ヤルヴィがアジア・ツアー(中国・台湾・韓国)も率いた。彼らの共演は4月の定期公演で聴ける。

山田和樹が首席各演指揮者を務めるスイス・ロマンド管弦楽団は、昨年末に100歳を祝った。今年は音楽監督のヨナサン・ノットと共に、4月、アジア・ツアーの一環として訪日する。3月末に、同プログラムを本拠地のジュネーヴ・ウイクトリアホールで演奏した後、ツアーに出發する。



チューリヒ歌劇場の新制作《グラン・マカーブル》から ©Herwig Prammer